

大規模な礎石建物跡を検出

今回の調査では、礎石2基と、礎石抜取穴9基を、東西4間分(13.2m)、南北2間分(6.0m)検出しました(写真1)。礎石は直径0.5~0.7mと巨大なものです(写真2・3)。周辺で8世紀後半の瓦が多く見ついていることから、恭仁宮に伴う建物ではなく、古代の山城国分寺に関わる礎石建物跡と考えられます。

今回の調査地の約20m南側で実施した平成11年(1999)の調査では、礎石建物跡1棟と、北に延びる廊下状の遺構が見ついています。今回見つかった礎石建物跡と柱筋が揃うことから、2棟の建物は連結していた可能性があります(図3)。

これらの建物の中心は南北に揃っていたと考えられるため、今回見つかった礎石建物は桁行11間、梁行2間で南北2面の廂をもつ、南北約12.0m、東西約38.1m大規模な建物を復元できます。

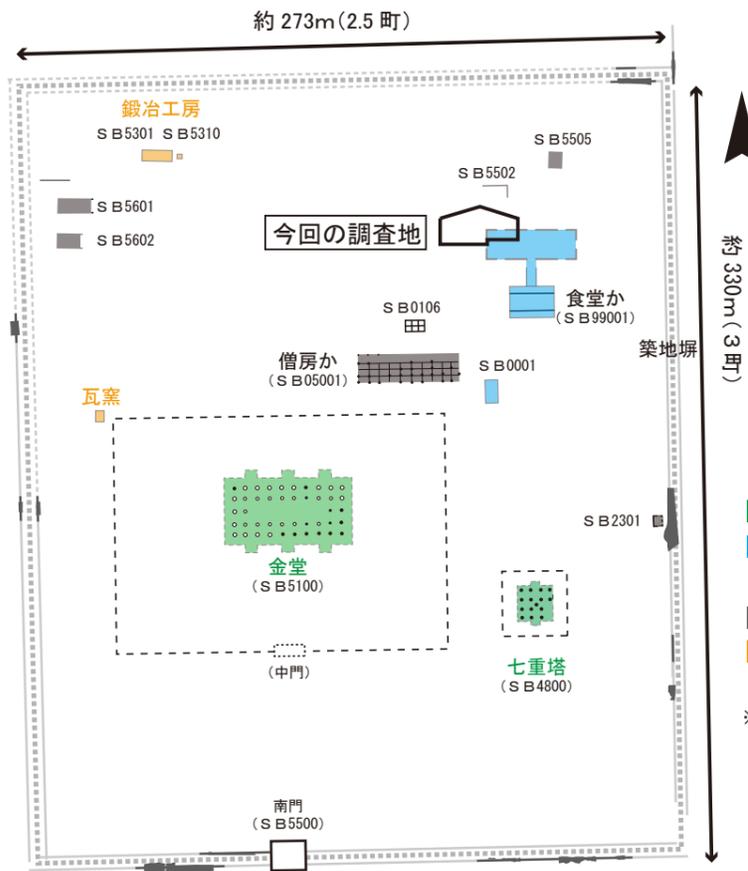


図1 山城国分寺跡全体図 (S=1/3,000)

食堂に関連する建物が

今回見つかった建物は、山城国分寺の寺域内では東北部にあたり(図1)。南都(奈良)の大寺院や各地の国分寺の類例では寺域東部に「食堂」が置かれることが多く、今回見つかった建物も食堂か、それに関連する建物と考えられます。

食堂とは、寺で修行する僧侶たちが、儀式的に食事を共にするなどして集団の連結を高めた建物のことです。関連施設をあわせて「食堂院」とよびます。

東大寺や西大寺、興福寺などの南都の大寺院では、複数の建物が南北に並ぶ食堂院がみついています。山城国分寺跡でもこれらの大寺院とおなじ、南北2棟が廊下でつながった構造の、大規模な食堂院が存在した可能性が高まりました。

また、桁行11間、梁行2間の二面廂付という規模は、建物だけで比べると東大寺や薬師寺にも匹敵する規模で、全国の古代寺院の食堂としては、最大級の規模です。

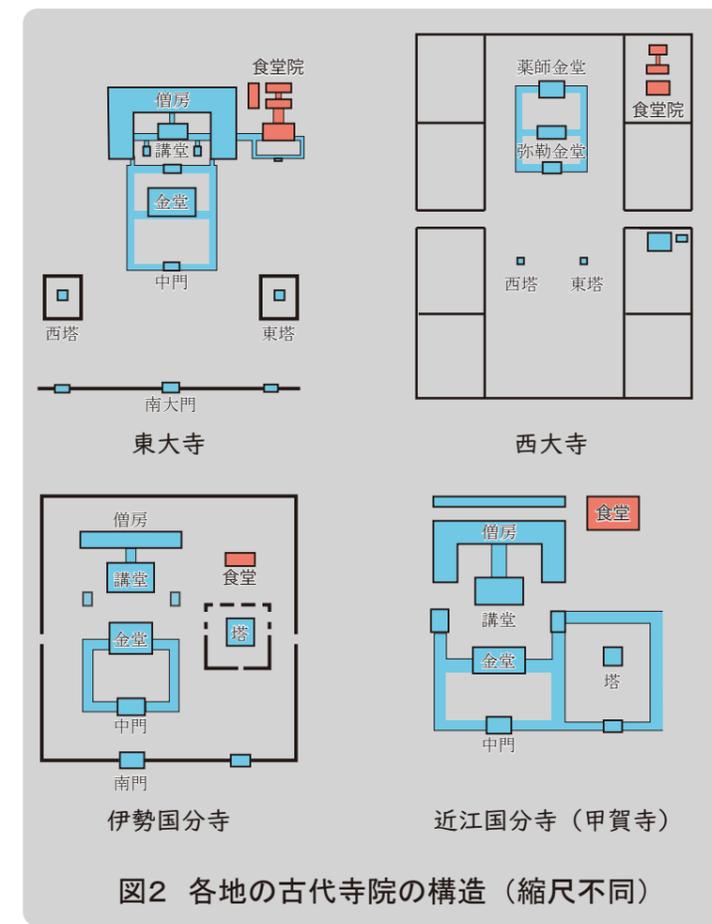


図2 各地の古代寺院の構造 (縮尺不同)

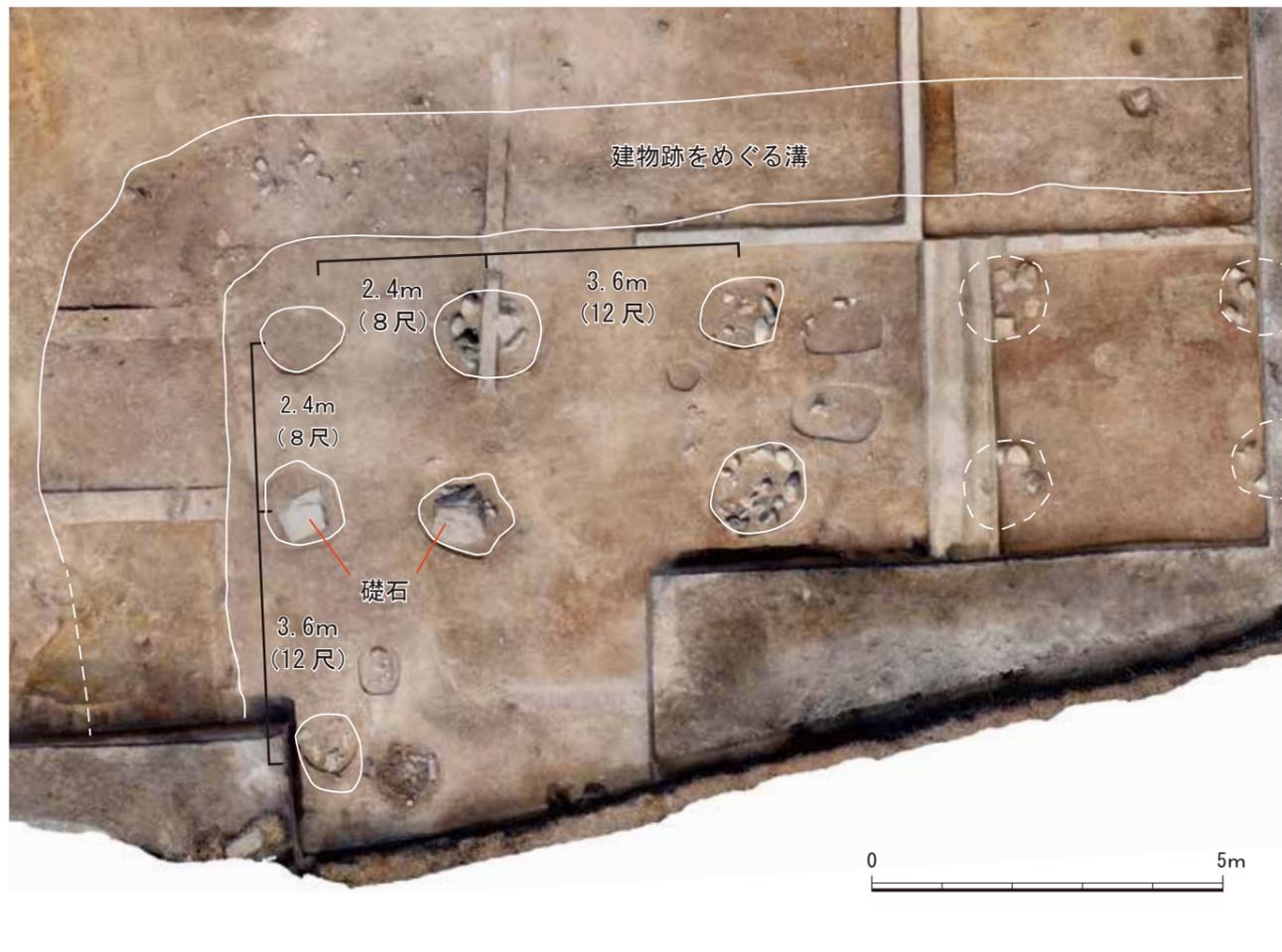


写真1 遺構検出状況 (上が北)



写真2 礎石建物と建物を囲む溝 (北西から)



写真3 礎石と礎石を抜き取った穴 (南西から)

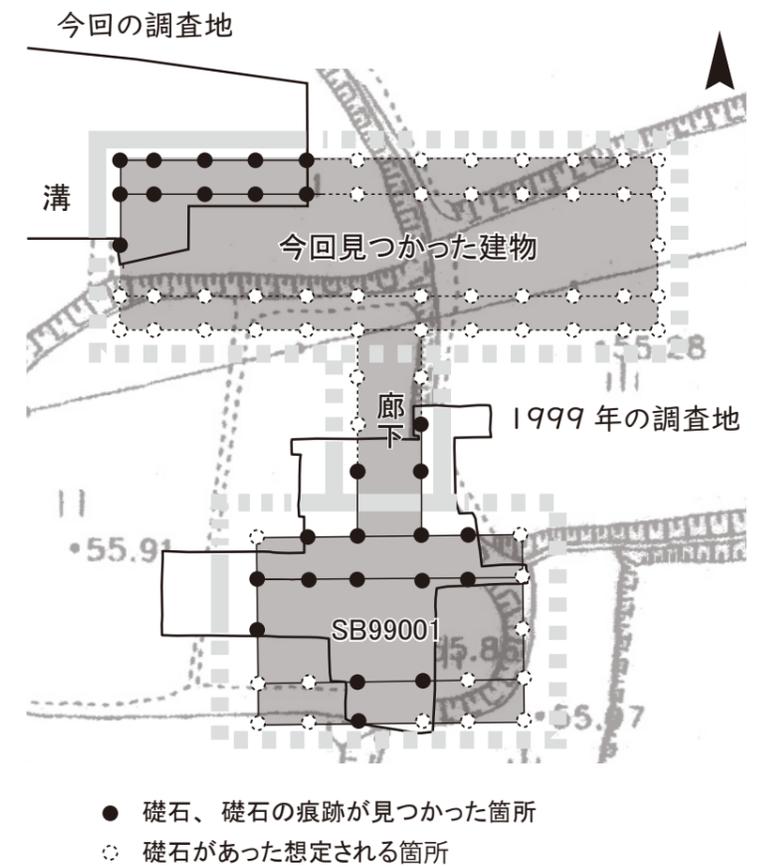


図3 山城国分寺跡の食堂院に関わる建物群 (S=1/500)